

わが慈悲、わが怒りに優れり (1 / 2)

説明：

神の慈悲がいかに顕在しているか、そして預言者と彼の教友たちによる慈悲の実践例を見て行きます。

より ハラー サラー (Reading Islam)

掲載日時 06 Dec 2009 - 編集日時 21 Oct 2010

カテゴリ：[記事](#) > [イスラームの信条](#) > [神について](#)

“ 率先して赦し、敢えて懲らしめない ” とは、慈悲という言葉においてよく使われる定義ですが、イスラームにおける慈悲とは一体何なのでしょう？



イスラームでは慈悲に深い意味が与えられており、それは全ムスリムの人生において重要な一側面を形成しています。というのもムスリムは慈悲を示すことにより、神からの報奨を受けるのです。

あらゆる創造物に授けられている神の慈悲は、私たちが目にする全てのものに見出すことができます。生命の維持に必要な光と熱をもたらす太陽や、空気、水などがその良い例です。

聖クルアーンには、一章まるごとが神の非凡なる性質の一つであるアッ＝ラフマーン（慈悲あまねく者）と名付けられている章もあります。また神の属性の内の二つは慈悲という語彙から派生しています。それらは「慈悲あまねきもの」を意味するアッ＝ラフマーンと、「慈愛深きもの」を意味するアッ＝ラヒームです。これら二つの属性はクルアーンの中で、「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」という句として、実に113章に渡って使用されています。この句は聖クルアーンの読み手に対し、神の無限なる慈悲と大いなる恩恵を常に思い起こさせるのです。

神は、私たちが罪を犯したとしても、悔い改めて同じ間違いをしないと誓うのなら、その罪は赦されることを約束されています：

“ 汝らの主は、慈悲を御自分の務めとされる。それで汝らの中、無知で悪事を行った者も、悔悟してその身を修めるならば（許される）。本当にかれは寛容にして慈悲深くあられる。 ”（クルアーン 6 : 54）

この節は、預言者ムハンマドが証言した神の言葉（ハディース クドスィー）により強調されています。

“ わが慈悲は、わが怒りに優るのである。 ”

同様に、親切さと同情心は預言者ムハンマド自身によって強調されています：

“慈悲深い者は、慈悲あまねき御方から慈悲を受ける。地上の人々に慈悲を示しなさい。そうすれば天の御方はあなたに慈悲をお恵みになるだろう。”（アッ＝スユーティー）

預言者による慈悲

預言者ムハンマドによる慈悲に関して最も良い例は、神ご自身が彼に関して語った御言葉から見て取れます。

“われらが汝を遣わしたのは、ただ全世界への慈悲のために他ならない。”
（クルアーン 21：107）

これはイスラームが慈悲を基礎として成り立っていること、そして神が預言者ムハンマド（彼に神の慈悲と祝福あれ）を遣わしたのは、全ての創造に例外なく注がれる慈悲であるということを確認しています。

神はクルアーンにおいてこう述べられています：

“今まさに、使徒が汝らの間から汝らのもとに現れた。彼は汝らの悩みごとに心を痛め、汝らのためにとても心配する。彼は信仰者に対して優しく、情け深い。”（クルアーン 9：128）

これらの節々は神の教えの伝道に際し、数々の困難を経験した預言者の礼節、振る舞いにはっきりと表れていました。また預言者は人々を導くことに関して最も親切であり、人々から危害を蒙った時にはいつでも彼らの無知と冷酷さの赦しを神に乞い求めていたのです。

預言者の教友たち

神は、教友たちについてこう述べられています：

“ムハンマドはアッラーの使徒である。彼と共にいる者は不信心の者に対しては強く、挫けず、お互いの間では優しく親切である。”（クルアーン 48：29）

一部の人々は、預言者であるムハンマドは品行方正であって当然だと見なすかもしれませんが。しかしその教友たちは、人生を神と預言者に献身をした普通の人間でした。例えばアブー バクル アッ＝スィッディークは神ゆえに、彼自身の財産をもって奴隷たちをその粗暴な主人たちから解放したのです。

ある時、預言者は彼の教友たちに正しい慈悲の概念について説明しました。彼はその時、それは自らの家族や友人たちのみに向けられるものではなく、知っている者にも知らない者にも等しく示される、一般民衆に向けられた慈悲と同情心であると述べています。

“小さな”慈悲

イスラーム以前には心無い伝統として、神々に対する自らの子供の生け贄や、女兒の生き埋めの風習などがありました。子供たちに対するこれらの行為はクルアーンと預言者のスンナによって何度も厳しく禁じられています。

預言者による子供たちへの慈悲に関しては、こんな話があります。ある時彼が礼拝を先

導していた時、当時まだ幼い子供だった孫のアル＝ハサンとアル＝フサインが彼の背中によじのぼって遊んでいました。起き上がった際に彼らが怪我することを恐れた預言者は、彼らが下りるまでサジダ（跪礼）を引き延ばしたのです。他にも預言者は、彼の孫娘であるウマーマを抱き上げたまま礼拝を行なったりもしていました。

このような預言者の優しさは、彼の子供たちだけでなく、道端で遊ぶ子供たちにも及びました。子供たちは預言者を目にするやいなや彼のもとへと駆け寄り、彼はにっこりと両手を広げて彼らを歓迎したものです。

更には礼拝の最中でさえ、預言者の生来の優しさは表れていました。彼はある時、このように述べました：

“私は礼拝を長く行なおうと意図して立ったが、一人の子供の泣き声を聞き、礼拝を短めにした。その泣き声の子供の母親の感情に影響することを知っているからだ。”（サヒーフ アル＝ブハーリー）

また多くの場面において、預言者は私たちに、いかに子供たちが愛情をもって育てられるべきか、そして彼らが体罰されるべきでなく、頬の平手打ちなどの屈辱的な仕打ちも受けるべきではないことを教えています。ある時一人の男性が、預言者が彼の孫に口づけするのを見て驚き、こう言いました：

“私には十人の子がいますが、その内の誰一人にも口づけなどしたことはありません。” 預言者はこう答えました：

“慈悲を与えない者に、慈悲は与えられないだろう。”（サヒーフ アル＝ブハーリー）

頭を撫でること

神は孤児たちに関して述べられています：

“だから孤児を虐げてはならない。”（クルアーン 93：9）

預言者は孤児に対してこの節の通りに振る舞い、こう言っています：

“孤児の世話を見る者と私は、このように楽園に入る。” そう言って預言者は人差し指と中指を合わせました。（アブー ダーワード）

預言者は、孤児が愛されているということを感じることを出来るよう、また両親が彼への愛情を失ってしまった時でも、まだ彼を愛し世話する人々がいることを知らしめるため、孤児の頭を撫でれば、その髪の毛の一本一本から報奨を受けるのだとして、彼らへの優しさを推奨しました。

また孤児の財産の保護は、神と預言者によって明確にされています。神はこのように述べられています：

“孤児の財産を不当にむさぼる者は、ただ腹の中に火を食らう者である。彼らはやがて業火によって焼かれよう。”（クルアーン 4：10）

また預言者のハディースでは、七つある大罪の内の一つとして、孤児の財産をむさぼることことが挙げられています。

この記事のウェブアドレス :

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/1183>

Copyright © 2006-2011 www.IslamReligion.com. All rights reserved.